

2016年(平成28年)

4月13日

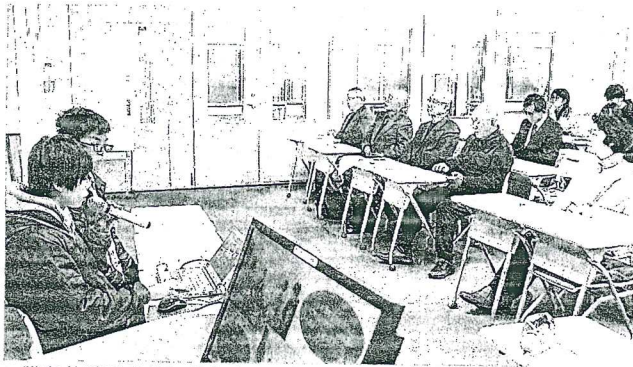
水曜日

享月



「戦争」聞き取りで学ぶ

西九州大生、体験者18人に



戦争体験者を前に報告をする学生

「被爆した老人の姿 今も忘れられない」

「明るい雰囲気の中で始まってしまおう」

カウンセリングを学ぶ西九州大の学生たちが、戦後70年を迎えた昨年8月から10月にかけて、戦争体験者の話を聞き取りした。学生の多くは祖父母も戦後生まれ。傾聴などカウンセリングの手法を生かし、初めて出会う戦争体験者と向き合った。後世に伝えたいとまとめた報告集が4月下旬に発行される。

心理カウンセリング学科の2年生46人が、西九州大の生涯学習センターなどで学ぶ70〜80代の18人をインタビュートした。担当者の学生2人と、陪席として別の学生、教員を交え、学内の面談室で1人1時間半〜2時間話を聞いた。
学生たちはこれまで学んできたカウンセリングの手法を活用。話しやすくなるよう相手の目を見てうなずきながら、話を遮らず、話の背景にある思いを感じ取りながら聞くように心がけた。
今年1月、同大佐賀キャンパス(佐賀市神園3丁目)で聞き取りをした相手も招いて開いた報告会。
宮崎絢女さん(20)は、戦時



中、鹿児島県の女学校から長崎県川棚町に学徒動員された石山チツさん(86)は佐賀市から「食事は5分以内と命じられ、消化不良で病気になる人が続出した」「長崎から被爆した老人

報告を終え、石山勝巳さん(左)にあいさつする学生(いずれも佐賀市神園3丁目の西九州大)

が何倍にも腕を腫らし、素足で川棚まで歩いてきた姿が今も忘れられない」という体験を聞いた、と報告した。宮崎さんは「私たちの世代は外国の人と付き合ひ、まず話し合ひを大切に」と、(石山さんから)「お願いされた」と伝えた。
隣近所で助け合って生き抜いたという別の体験者の話を報告した目野智裕さん(20)は「人づきあひが希薄になった現代にはない、ものすごい人間味を感じた」と話した。実際の戦争体験者と話すのは初めてで「教えてもらう気持ちで話を聞いた」という。

報告会に参加した、チツさんの夫で、元同大教授の石山勝巳さん(89)は学生たちに「皆さんは「戦争は暗い、つらい」と思っただろうが、実は当事者は暗くなかった。「勝った勝った」と喜び、「早く軍隊に入らないと戦争が終わっちゃう」と志願した若者もいる」と語りかけた。自身は鹿児島県の歩兵部隊で戦車の下に爆弾を抱えて飛び込む「人間爆弾」の訓練を受けた。「明るい雰囲気の中で始まってしまおうのが本当の戦争の怖さ。今は世界の情報がわかる。それを見極めてほしい」と伝えた。取材に「墓場まで持って行くつもりだったが、聞いてもらえてよかった」と口にした。
これまで平和学習で戦争について見聞きしてきた学生たちだが、ほぼ全員が直接戦争体験者と話すのは初めてだった。「何と言葉を返したら良いかわからなくて、うなずきしかなかった」という学生も、涙をこらえて話を聞いた学生もいたという。担当の長野専子教授は「カウンセラーになる上で貴重な経験をさせて頂いた」と話した。
報告集は4月下旬に完成予定。問い合わせは心理カウンセリング学科共同研究室(09952・37・9519)。(松川希実)